

④たいそうをする

③手をひねりだす

②足をひねりだす

①粘土を人形型に



粘土のたいそう

九・デジカメで写真絵本を作る

粘土のたいそう絵本

学生たちは粘土で人物を作り、デジカメで撮影して簡単な文章をそえて絵本を作りました。

美術教育の中で土粘土の教材は「汚い・重たい・壊れやすい」という理由で先生方から敬遠されがちです。油粘土は使われますが、子どもは「臭い・べとつく・のつべりする」といって嫌います。

わたしは大地から生まれた自然の素材である土粘土をもっともって使ってほしいと願っています。大学生は乾いて硬くなった古い粘土を柔らかくするところから教材研究をはじめます。砕いて水をかけ、素足になり全体重をかけて足の裏で練ると元の柔らかさになります。土粘土は焼くと元に戻りませんが、固くなったものは繰り返し何十年も何百年もリサイクルできるすばらしい素材です。再生した粘土で人物を作り、すぐにデジカメで撮影して、さらにおなじ粘土のポーズをかえて撮影して、枚数が増えると絵本作りの種になります。

一時期、クレイ（粘土）アニメが子どものこころをとらえ、人気を博したことがありました。土粘土は子どもたちの成長発達により影響を与えます。詳しい



台紙に糊づけする



写真を切り抜く

ことは拙著『粘土細工から彫塑教育へ』（明治図書出版）を参照してください。

「粘土のたいそう」の方法

一、まず、一キロの粘土で二人の人物を作ります。ここではお父さんと子どもを「ひねり出し」の技法で作ります。ひねり出しの技法というのは、粘土を人參のようなかたちにして五十四ページの図のように手足をひとつづきに作りま
す。そうすれば動きを自由にあらわすことができます。しかも、手足をばら
ばらに作ってくっつけるやり方と違って、壊れにくいです。

はじめに背の高いお父さんと背の低い子どもを作り、ふたりの組み合わせを
変化させてデジカメで撮影します。多い目に撮影して絵本に使用したい写真を選
びます。選びながらお話を考えます。

二、選んだ写真をプリントしますが、拡大したり縮小したりしてお話にあつた効
果的な場面を決め、プリントアウトします。カラープリントよりも白黒で印刷
して、台紙をカラーの紙にした方がよく見えます。

三、粘土の人物だけ切りとって台紙の上で斜めにしたたり、時には逆さにするなど
して画面を構成します。決まれば糊づけし、空いたところにお話を書きます。

四、写真を貼った方を内側にして二つ折りにし、裏側を糊つけします。あとはハー
ドカバーの製本の仕方の手順を守って丁寧に作りましょう。



科学絵本『リュウゼツラン』(本紙)



科学絵本『リュウゼツラン』(表紙)

この方法を応用して人物と動物を組み合わせてお話を作り、動物の手足もひねり出しの方法で作ると、さまざまな組み合わせができます。

観察記録で科学絵本

奈良教育大学の大学院生が、六十年に一度しか咲かないといわれている「リュウゼツラン（竜舌蘭）」の観察記録を修士論文に書きました。構内でリュウゼツランが咲いたというニュースが放映され、多くの人たちが見に来ました。

そこで、子どもにわかりやすく説明するために、デジカメで撮影した花の成長記録の写真をA3の大きさにして紙芝居を作りました。さらに、その紙芝居をA4の大きさの絵本にしました。

このように紙芝居から絵本にすることもできます。紙芝居はお話を裏に書きますが、絵本は写真の横にお話を書くので画面の構成が難しいですが、工夫するとすばらしい科学絵本を作ることができます。

小学生なら、ひまわりや朝顔の観察日記をデジカメ写真を使って絵本にすることがができます。